批評及び紹介

孔雀經中藥叉の地理的列表に就きて

シルヴァン・レヴィ氏論文要領

本編は佛國亞細亞學會誌 Journal asiatique の一九一五年一月二月號(X série, Tome V, N°1.)に Sylvain Lévi 氏が發表せし論文 Catalogue géographique des Yaksa dans la MAHĀMĀYŪRĪ の中に就きて、特に西域史に關係ある二三の攻究論證の要領を抄出摘記せしものなり。

孔雀經はその梵名を Mahāmāyūrī vidya-rājñī と稱し、北方佛教に於ける五大儀軌の一なり。此の經は古來久しく行はれ、漢譯に四種(六譯中列表あるものは四譯なり)と及び西藏譯とあり、ネパールには尙ほ梵本のまゝにて信奉せられ、中央アジヤに於ける發堀梵本の最初のものは此の經の梵本の斷片兩箇なりしと云ふ。而して此の經の深く信ぜられたるは佛教の原始時代に初り、佛が祇園精舍にありし時、毒蛇に苦める比丘莎底の爲めに大孔雀王咒を授け、並に諸神諸天諸菩薩名及び神咒を說き、大金色孔雀の擁護によりて其毒を除き一切の苦を斷ずることを敎へたるものなり。蓋し孔雀は毒蛇の敵にして之を食すと信ぜられたるより、孔雀王咒に功德ありとなせるものなるべし。ことに金色の光彩を有し、ヒマラヤ山上に住する孔雀の明王を保護とせば日夜その守護を被ると信ぜられ、その要領は已に Jātaka 中兩

所に現はるゝ所にして、要するに大金色孔雀の物語より成れる最初の核の周圍に、あらゆるものを蒐輯せるものなり。先づ經の最初に啓請法あり、次に涉底比丘の譚を擧げて所說の所以を明かにし、次に大咒、梵讃、陀羅尼を連續列擧し、以てその功德を說き、更に四天王、地方守護の藥叉、二十八夜叉鬼名と及び菩薩を警護すべき女神を列記し、終に此の經の功德を說けり。Lévi 氏は、此の中に就て特に藥叉守護地方の列表に就きて研究せるものにして、氏が採用せし原本は初めて露國皇立考古學會誌 (Zapiski Vostočnago otdyeleniya Imp. Russk. Arkheol. Obshchestva, t. XI, 1897-1898. Petersb. 1899) の東洋部 Mémoires 中に、Serge d'Oldenbourg 氏が印刷發表せんとして能はざりし孔雀經の梵本にして、之れに他の梵本の二を對校し更に漢譯の四種（後秦羅什・梁僧伽婆羅・唐義淨及び不空）と西藏譯とを合せてその異同を比較し、一々詳細の考證を加へたるものなり。尤も梵本の對校と漢譯梵語の表とに重きを置きしを以て、その史學上及び文學上より見るべきもの少しと雖も、尙ほ二三の參考に資すべきものあれば、その要を採りて玆に紹介することゝなしぬ、

VARṆU　藥叉守護の國中印度西北邊境地方にあるものゝ一なり。此の地は既に古代有名なる聲明大家 Pāṇini（波儞尼）の記する所にして、その書 Gaṇapāṭha には此と共に Suvastvādi, Sindhvādi, Kacchādi を列擧せるが故に、此の Varṇu が Suvastu (Swat河) Sindu(Indus)に近く乾陀羅附近にありしは明かなり。Pāṇini の此の名を擧げたるは此が Kanthā なる語と關係し、Kanthā が Varṇu 國の一地方名としての場合に於ける形の變化の規則を說きし所にあり。然るに此の Kanthā は佛敎所傳に依れば佛遊行の地方にして、說一切有部の毗奈耶に依れば、佛は印度河を渡りし後 Apalāla 龍王を降してペシャワル附近の迦膩色迦塔の所在地に來り、此より Kanthā に往きて

更にスワット河流域なるOḍḍiyanaに到りし後、Revataを經てNagarahāra附近にGopalaを伏し、その尊影を留めたりとなせるKanthāは實に此の國内に在りし地名なり。智度論にも略〻同一の所傳を傳へ、佛は月氏國に行きてApalāla龍王を降し、之より月氏の西方に赴きてRākṣasiを伏して洞中に尊影を留め、此處より闍賓に赴かんとして隸跋陀山上に到れりとす。前のNagarahāraは今のJalalabad附近にあり、隸跋陀は卽ち前のRevataにして、大莊嚴論經には迦濕彌邏の聚落、Tamasāvana, Mahāvanaと共にRevatakaは聖者の好む幽居の處とせられたり。此のMahāvanaはカーブル河の北方Yusfuzaiの境にあるMahaban山にして、久しく歷山大王時代のAornosの地として信ぜられし地方なり。歷山大王は此のアオルノスの近村Embolinaに根據地を建てしが、此のEmbolinaは經中藥叉守護地方の一なるAmbulimaを指すものにして、今Indus河岸のAmb卽ち之なり。仍て思ふにMahabanとAmb、Swat河とIndus河との間に介在するBunerの國は此處に所謂Varṇuなること疑なかるべく、從つてAornosの名も亦梵名Varṇuのギリシャ語化せるものと見ることを得べし。恐らくはPtolemée がOuarnosと稱し、Tokharoiの次ぎにBactriaの種中に置きしものは卽ち此のVarṇuなるべし。玄奘が大唐西域記卷第十一の終に記せる伐剌拏亦たVarṇuを現はせるものにして今のBannuの地とせらるゝ所なり。伐剌拏に隣りて阿耨荼國あり、釋迦方誌には單に耨荼とす、Gaṇapāṭha書中にVarṇuと共にその附近の國としてBhaṇḍuの名を擧げ、Varṇu Bhaṇḍuと共に又Khaṇḍuの名を記せり。之れ或はBhaṇḍuはカーブルのShahi王が都せしと傳へらるゝUdabhāṇḍapuraに比すべきにあらざるなきか、從つてKhaṇḍuは玄奘が印度河を渡りし處の烏釋迦漢荼(Udaka-khaṇḍa)を指すものなるべきが如く、その位置は從來Udaka-khaṇḍaの

地と信ぜられたる Und(Attok の北一五哩)は Bhaṇḍa にして Degne 氏が Udaka-khaṇḍa とする所の Und より更に西北六哩にある Khund が Gaṇapāṭha に所謂 Khaṇḍu を現はすものなるべき歟。

BHADRAŚAILA　此の名の前に Takṣaśila の名記さるゝと雖ども、若し Divyavadana の記事を正しとすれば此の名稱は Takṣaśila の古名をあらはせるものなり。僧伽婆羅の譯には掣陀世羅とし、不空は吐山とす。掣陀世羅は恰も吐山と譯さるべき Chardasaila に當る梵名の音譯なるが如く、又西藏譯にも吐山と譯さるべき西藏語を以て之れに充てたり。何れにするも、此の稱呼を有する地方は Takṣaśila 及び Gandhāra の附近なりしは明かなりとす。然るに此の地の藥叉の名を Kharaposta と云へり、此の名は義淨譯には竭羅哺窒妒とするも、僧伽婆羅には珂羅留摩とし不空譯及西藏譯には驢皮となせり、而して之によりて Khara は驢の梵語なれども、Posta は全然梵語にはあらずしてイラン語に皮の義なる Post と同語なることゴーチョー氏の研究によりて明かなり (Gauthiot, Mem. de lasoc. de Linguistique, XIX, 1915; Pustaka . . . *Pōst*, anest. *Pōsta*, pehl. *Pōst*, pers. *Pust*)。即ち Kharaposta の語及び不空の譯語により、當時イラン語が廣く印度に知られ、又印度語中に入りて梵語と同じく使用せられしを證するものと云ふべく、殊にイラン語の影響が Takṣaśila 附近の地方に於ける藥叉の名の内に認めらるゝ如きは頗る重要なる事實なるべし。

NANDIVARDHANA　此の名に種々の譯あり、僧伽婆羅は與咎跋他那(=hiṅguvardhana)義淨は難提、不空は呬隅摧と譯し、他の原本には Hiṅgumardana とす。說一切有部毘奈耶には西南印度に於ける佛遊行の地方の一として此の名を列ね、今此の列表中にも Raurakaと Lampaka (Lamgham) との間に置きしはその相似の位置を示すものにして、恐らくその都邑は

山の出口に當り存せしものなるべし。摩訶僧僧祇律には之を Vaiśali, Puṣkalāvati, Takṣaśila と共に毛皮供給の四王國中に數へ、月藏經には Nakṣatra Śata-bhiṣaj の配下に屬する九國中に鳩吒婆と跋祿迦との間に配せり、鳩吒婆は佛遊行中 Nandivardhana に至りし前に止まりし所なること說一切有部の毘奈耶に說かるゝ所にして、且つ此處にて Gopala を伏せしことを記すを以て、西域記に佛が Gopala を伏して聖影を留めしは Nagaraḥāra の石窟なるを以て考ふるに、Nagaraḥāra は Lampaka より Peshawar に至る途上 Jalalabad 附近に當るを以て、Nandivardhana の位置を强いて求むれば恐らく Jalaldbad と Peshawar との間に求むべきものなるべし。その名稱は Hingumardana 及び Hinguvardhana と云ふも、此等三箇の異名は何れも同一場所を指すものにして、Avadānakalpalatā に佛が龍王 Gopala を伏してその影像を窟內に止めしを Hingumardana 村にての事件とせるは、Nandivardhana に於けると同一なるを以ても知らるべし。且つ Hingu なる名稱が地理上確實なるを證すべきは、香料として古來印度人の好で求めし hingu (又 興渠) は印度には發生せずして、アフガニスタン及びペルシャにのみ生ずること是なり。玄奘が西域記に漕矩吒國の條下に記せる興渠草生羅摩印度川とするは此の hingu を云へるものなり。Amara Kośa (II. 9. 40) に此の名の同一語として擧げたる vālhika 及 rāmaṭha は又屢〻地名として印度西北邊境に發見せらるゝは明かなる事實なり。

漕矩吒の名は Julien 氏は Tsâukouṭa (Mèmoire. II.) と讀み、V. de St Martin 氏はその首府鶴悉那をば Ghazni と比定し羅摩印度川を Helmend とせり。Marquart 氏は此の名を解說して印度語より成れる混成語とし、一部は音譯により他は意譯を採りしものにして、矩吒は kuṭa を寫し、漕は隋書の漕國と同じく Jawuwla, Jabula (Ǧawul) の節略となせり。

然るに Watters は此の名を以て古來サフランに有名なる Jāguḍa の國名を恢復するものとして大なる誤なきものとし、漕矩吒は卽 Jāguḍa を寫すものなるよしの假定說を出し、菩提樹下のサフラン塔が漕矩吒より來りし隊商長の建てし所なる事を想起するものなりとせり (II. p. 266)。Śiśupālavadha (20,3) には Safran Jauḍa (Jāudakunikuma) の句あり、Mahābhārata (III. 51. 1991) に印度の西方に當り、Pahlava, Darada, Yavana, Śaka, Hāraḥūṇa, Cina 等の民族雜居する處に、Tukhara と Rāmaṭha との間に Jāguḍa の國ありとなせるは之を補ふて餘りあるものと謂ふべし。梵語字典(十ノ八)に玄應音義十九を引きて興渠は闍烏茶婆他那國より出づる樹汁今の阿魏是なりとし、慧琳音義にも同一の記事あることを記せり。此の闍烏茶婆他那は正しく梵語 Jā-gu-ḍa-ya[r]-da-na に當るを以て、hiūg は Jāguḍavardhana 國より出づることを意味し、之を以て略 Watters 氏の假定說を確かむるを得べし。卽ち、漕矩吒は正に Jāguḍa を表はすものにして、その地は凡ての場合アラビア地理學者の所謂 Zabul (Zaboulistan) に該當するものと斷ずべきなり。

又 Hiūgumardana の名は Ptolemée が Sogdiana 中に置きて Iaxartes と Oxus との間に在りとせし Indikomordana と稱する一市と認めらるべく、又 Ptolemée が Isagouroi (Ionagouroi) と稱するは恐らく Jāguḍa を指すものなるべし。これをギリシャの地理學者は二箇所に記し、一は Sērika に至る途上 Kasia 山脈と同緯度にありて Asmiraioi に近く Pamir 附近 Oxus の上源地方に置き、又他の所にては Isagouros (Ithagouros) の町を Takṣaśila の近く Arsa (= Urasa) の內にありとなせり。

氏は更に進んで漕矩吒に關する唐書の記事に就きて說をなして曰く、唐書には此の國の名を謝颰とせり、此れ武后が古稱に代りて用ゐられしものなれど

もその意味に關して何等說く所なし。惟ふに謝颰の謝は turc-indien に所謂 Śāli なる稱號を寫せるものなるべく、班超の爲に破られたる大月氏の副王も亦此の稱號を有せり。而して颰は暴風を意味する語なるを以て考ふるに、武后が Jāguḍa 國を "tempête des Śāli" として現はさんとせしが爲めなり。後謝颰王は罽賓王の稱號を得るに至りしは卽ちその擾亂(颰)の結果に外ならざるを悟るべし。Kapiśa はトルコ Śālis の本領なり、その王朝は卽ち此の Śāli の擾亂に到れて婆羅門種の Śāli 新に王朝を開きて Udakabhāṇḍa を以てその都とせりと。されど此の部は全く氏の誤解に出で、ことに謝颰を "tempête des Śābri" と解せる如きは全く採るべからざること明かなり。余輩は寧ろ此の謝颰こそ Marquart 氏が漕に對して試みられたる Gāwul の音譯なるべきことを一言し置かんとするものなり。

KHASA に就ては僧伽婆羅は迦舍と譯し、義淨及不空は之を疎勒と認めたり。されどこは梵語として大なる價値あるものにあらずして、單にヒマラヤ山中の一種族を指せるものに過ぎず。

ŚAKASTHĀNA 僧伽婆羅は莎柯娑他那、義淨は鑠迦處とし、印度古代の叙事詩中には屢〻散見する所なり。されど此處に云ふ所の Śakastāna は特種のものにして、Isidore Charax の Sakastanē、卽ち Sagestan (Sestan) とは全く異なり、Mathura の獅子柱に刻せられたる碑銘中に見ゆるものと同一のものなり。

UḌḌAYĀNA 印度西北州 Swat 河流域に在する所謂 Udyāna にして、漢譯に烏萇とし西藏譯に U-rgyan として西藏佛教の始祖 Padmasambhava の本國として Udyāna に比せらるゝ所なり。その名稱は Kushan 時代より現はれ、Saṁvāt 紀元七七年紀ある Mathura 碑銘には Uḍḍiyāna 國の Jīvaka (*Jīvaka Odāyanaka*) が Huviṣka 王精舍に一石柱を奉納せることを注記

せり。又 Jātāka の一には諸種の財寶金銀珠玉と共に Kāsi の織物 Uḍḍiyānakambala（卽ち一種の毛織物）の記事あり、Hevajratantra には Jalandhara の傍に Oḍḍiyāna の國を記し、その法護の譯（大悲空智金剛大敎王儀軌）には之を酤羅山淸淨園林とせるは Uḍḍiyāna を Udyāna 園庭と見たるによる。酤羅は或は醯羅なるやも知らず、玄奘は Udyāna の聖山として此の名を記せり。曾て Foucher 氏は Oḍḍiyāna の Maṅgakoṣṭha を烏仗那の都曹揭釐城に假定せしことあり、此の地は有部の毘奈耶によれば佛が勝軍王の母を敎化せし所にして、西域記には烏仗那王 Uttarasena（勝軍王）の母となせるは略〻相當するが如し。法護が酤羅とせしは原語 Kulāta を寫せしものならんも。恐らく醯羅を誤りて酤羅とせしものなるべし。支那には烏仗那・烏萇・烏茶とし、唐書西域傳にその記事あり。然るに同傳に別に吐火羅國の條下に越底延國の記事あり、その地 Indus（辛頭）河の北方、Chitral（賒彌）の東南千里にあり、氣候溫暖にして稻米石密の多きを記せり。余曾て越底延を梵語 Oḍḍiyāna と假定せることありしが、唐書の編者は此の國を Udyāna 國と區別せしは明かにして、此の國の特徵とする所は Udyāna の記事に現はれ來らず、又その記す所互に反するものあり、且つ玄奘が土產少なく少しく甘蔗ありとする記事とその國の Indus 北方にありて賒彌の東南に當る方向より考ふるに、越底延は確に Swat 河流域 Udyāna の地に比すべきものなるべし。

次に言語の上より國名を見るに、梵文學上印度古代に此の名の證すべきものを見ず。玄奘は西域記に園苑と解し昔輪王苑園の地なりとし、開元錄第六那連提黎耶舍の條に之を引けり。Uḍḍiyāna が Uddiyāna, Udyāna となるは自然なれど、此を直ちにその憑證とすること能はず、此の名が園苑の意味あるは勿論なれども、已に地名としては園苑にあらずして一都

市の形を備へしも亦確實なりとす。西藏には U-rgyan. O-rgyan と音譯し、Candra Das 氏は Oḍiyāna 國梵語の Udyāna なり Lamyig に從へば今 Cabul 地方 Gnzneo (Ghazni) に當るとしその音を O-diyan となせり。此の O-di-yan は Oḍḍiyāna にして Udayāna には非るが如し。その他 Jäschke 及 Csoma 兩氏も Oḍiyāna とし印度西北部にありとするも、時に之を Ujjaini とすることあり。されど此等の名稱はその音韻の上より考ふる時は、從來用ゐ來りし Udyāna の名は正に印度古代地理中より削除すべきものにして、之に代り Oḍḍiyāna Uḍḍiyāna の名を Swat 河流域の地方に置かざる可らず。而して Oḍḍiyāna 及 Uḍḍiyāna の最初の意味に拘はらず、その名が支那所謂于闐の名稱と頗る關係あるを思はしむるものあり。　于闐は今の Khotan にして印度には之を Gostana と云へり。此の Gostana は諸胡には豁且 (Hwo-tan) と云へるは、印度に於て已に此の中間物なる Wothana なる形あることを示すものなり。大方等大集經に引ける于闐の註に優他耶那譯して後堂と曰ふことを說けり。尤も此と Uḍḍiyāna と混同するを許さずと雖も、于闐の原形として U-dyan の如き語は當然梵語に所謂『飛來』の義ある Uḍḍiyāna なる語を想ひ起すべく、優塡王の作らしめたる栴檀佛像が于闐の媯摩の地に飛來せし傳說は宋雲、玄奘の傳ふる所にして、優塡は Udayāna なるを以て于闐と同音にして且つ Uḍḍiyāna と音相通ずるものあるより考ふる時は、Uḍḍiyāna によりて寫されたる飛來佛像の傳說が、その國名と結び付きて優塡于闐と互に相關連せし如き感あり。又佛敎宇宙說にも于闐の名が關係あるが如く思はしむるものなきにあらず。卽ち須彌 Meru 山を中心とせる世界の四洲に、南に Jambudvipa、北に Uttarakuru、東に Purvavideha、西に Aparagodāna あり、此等四洲中 Jambudvipa は吾人の居住の地にして、他は何れ

もその方面に於ける代表的地名を擧げて之にその方面を冠せるものにして、Uttarakuru は北方 Kuru を、Pūrvavidehā は東方の Videhā を意味する如く、Aparagodāna は西方 Godāna を意味する事明かなり。卽ち當時西方にて特に知られたる實際上の國を神祕化して遠くに置きて四洲の一に擬したるものなるべきは、他の二洲に依りて明かなるべし。仍て考ふるに Godāna は于闐の原形にして Khotan に近き音を有する原名より出でしものなるべく、之によりて Khotan が一時印度境內に在りと信ぜられたる時代に此の世界說を生ぜしものなるべし。

VOKKĀṆA　此の地は Bṛihat Saṁhitā にありて、Pañcanāda (Panjab), Ramāṭha, Pārata と共に西部印度の地とせらる、又同書に Tokhara の北 Issikul と Samarkand との間にある Sūlika の山民と共にこれを記せり。Jain 敎の書 (Prajñapanā) には Milikka (Mlecha 蔑戾車)の內に Vokkana を Yavana, Cilāya (Kirata) Ramāṭha などゝ共に記るし、有部毗奈耶には Mahākatyāyana が Rauruka より歸る時 Lampaka, Syāmāka (商彌) より Vokkana に至れりとす、義淨の譯には嶺雪を超えて印度にゆき、又縛叉河を渡り布濃市に至れりとなす。此れ等を以て考ふるに、Katyayāna が Vokkana より出でゝ Oxus を渡りしことを認むべきを以て、Vokkana は恐らく今の Wakhan を指すものなるべし。

Ramāṭha は Vokkana と共に記され、Bṛihat Saṁhita には Indus 河東 Śatadra Vipaśa 河附近の住民と共に擧げたるも Mahā Bhārata (III) には Jāguḍa の附近にありとす。卽ち Ghazni 及 Helmand 河の上流にあり、又同書に表中 Yavana, Gandhāra, Saka, Tukhara, Pulinda と共に此の名を擧げ墮落せし人民の一とせり。Ramāṭha は Jāgṇḍa の如く hingu 草を產するを以て名あることは Amarakosa (II. 9.40.) Hemacandra (422) Halāyudha (II, 462) に載せた

る記事を以て證すべし。即ち此の地は恐らくGhazni (Jāguḍa) と Wakhan (Vokkana) との間に在りてPtolemée が Paradēnē (Paraita) の傍 Gedrosie 内に置きし Rhamnai と相當するものなるべしと。

最後に氏は列表中に現はれたる地名につき概觀を與へ、その列次の順序が自ら秩序あり、各その地方によりて當時著名なる地を擧げたることを指摘し、且つ印度の國境が Lampaka を以て限りとするに拘はらず境外なるべき Tukhara, Śakastan, Pahlava を附屬せることを注意し、該經の編者が西北印度邊境の地に注目し、印度の勢力の及ばざるべき此等の地方より、遠く Arachosia Wakhan の地方までも表中に列記せしは考ふべきことなりとせり。而して又氏は此の經の成立年代を考察し、七世紀の初期Harsha朝の詩人 Bāṇa の記す所により此の經が當時用ゐられたるべく、Tukhara, Śaka が印度邊境の Scythia族にして Pahlava が境内の Parthia人を指すものなれども、古來西方外人を記すに忘るべからざる Yavana 人を擧げざる所より考ふるに、恐らく少なくとも此の列表が Gupta 朝より以前、Kushan 王朝時代即ち紀元三世紀頃に成りしものなることを假定せり。

（大谷勝眞）